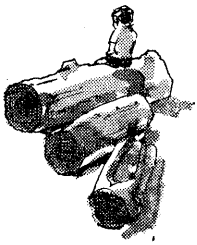
遊べない子と現代の幼稚園

有木昭久



もう八、九年前になるでしょうか。

歩け歩けハイキングをしに多摩川べりにまいりました。途中、広い原っぱで遊ぶことになって、

「ここでひと休み。自由に好きなことをして遊んでください」といったところ、何をして遊んだらよいのか、途方にくれている子がたくさんおりました。これには、むしろ私の方があっけにとられてしまい、私の子どもの頃とくらべて、何というちがいか、ともかくいっしょに遊びながら、考えてしまいました。

これは大変なことだぞ、ということで、とうとう、私は子ども会づくりに首を突っこむことになりました。大学の二年生のときです。

それから今日まで、品川の自宅をありんこ文庫（私設図書館）として、会員が二千人にまでなり、いつのまにか、社会人に、あるいは大学生、高校生になり、今はリーダーとして、大いに働いてくれるようになりました。私の方は大学を終えると、幼児教育に首を突っこみ、遊びによる幼児教育の研究、実践にとりくんだわけです。

ことの発端は、そんなわけで、若さとエネルギーだけをたよりに始まったわけでしたが、当時の頃から、高校生や大学生で近所の小学生を集めて遊んでくれる〃お兄さん〃が珍しかったせいもあって、人数がどんどんふくれていったのでした。

教育者としての意識など、大してもたずに、ただ自分もいっしょになって遊ぶことが、なにより楽しくて、続けてきたわけです。現在に至って、結局、〃遊び〃に真剣に取り組ま

ざるをえないところにきてしまいました。

いってしまえば、本当に当たり前のことと思われるのですが、子どもにとって〝遊びはかけがえもなく大切で、人間形成の上で、かくことのできないもの〟ということです。二十代、三十代の人たちの多くは、昔、やんちゃ時代、まっくろになって、「カラスがなくからカーエロ」とうたいながら、日暮まで、何もかも忘れて、遊びに没頭した経験をもっていることと思います。その頃は、中学生や高校生もいっしょになって、それこそ、〝みそっかす〟といわれながら、小学校の低学年の子どもまでが、金魚のうんこのようにくっついて、遊んだものでした。

そうして、小さい子どもたちは、大きくなると、今度は自分よりも小さい子たちを仲間外れにしないで、いっしょに遊ぶという習慣がつくられていきました。

一体いつ頃から、子どもたちの地域集団はくずれていったのでしょう。たしかに、テレビの普及と、受験勉強が、子どもを家にしばりつけた大きな要因でもありましょう。それに加えて、遊び場であった道路が、自動車に奪われたこと、空地はビルに奪われたこと、それから、誘拐、交通事故などの問題が重なって、親が子どもを外に出せなくなったということもあります。子どもはどこに行ったらよいのか。せまい家の中で、テレビをみている子どもの姿は、本来、エネルギーそのものである子どもの姿としては、全く不自然でしかありません。子どもの退廃は、おとなの、そして社会がもたらしたものです。子どもにとっての公害は、以前からのものであったわけです。

子どもが遊びたくないはずはありません。〝遊べない子〟というのは、遊ばない子をつくった社会の所産であって、遊びを知らない子をつくってしまうことに、社会の責任があるはずです。

◆遊びは幼児教育から

私が幼児の教育に関心をもったのは、ひとつには、子ども会で幼児期から中学生になるまで、つき合ってきた子どもたちがあったこと。これは、長年、子ども会をつづけた者のおもしろさだと思うのです。小学校や中学校の先生とちがって、この場合は、幼い頃から成人するまで子どもとつき合えること、それによって私の遊びに対する考え方が形成されてきたからです。多くの教育者は、一定の期間だけしか、子どもと知り合えないのは、非常に不幸だと思うのですが、一年に、一、二回の同窓会だけでなく、何かほかの方法で、子どもと接しつづけてもよいと思うのですが、どうでしょうか。

さて話を本筋にもどして、子ども会を続けることによって、〝遊べない子〟をつきつめたとき、幼児教育にぶつかったということがもうひとつのきっかけです。現代の子どもの環境は、ひどい状態ですが、幼児にとっては、もっとひどい状態にあると思うのです。全てといってよいくらい、幼児をとりまくものが、幼児にとっては生きにくい、ふさわしくないといえます。その原因をつきつめれば、物価の問題にまでふれなければならなくなりそうですが、もっと現実の幼児に関すること、身のまわりのひとつひとつを取り上げてみてもそのことはいえます。

さて、あまり多くはない私の幼児教育の経験から感じていることがたくさんあります。私の構想は、かなり多岐にわたるのですが、いくつかとりあげてみましょう。

①土とのふれ合い

子どものしたいことをどうやって、具体的に、まわりのおとなが手伝ってあげられるかの問題です。幼稚園に土がなくなってきているのは残念なことです。砂場などという、小さなものではなく、人間、土から生まれて土に帰るということからしても、幼児の時からどろんこ遊びをさせてあげたいと思います。

それには、よごれるということに対する認識の仕方を変え、風呂場やシャワーの設備が必要なこととなるでしょう。よごしてはいけないのではなく、よごしていいのだが、それをきれいにあとしまつすることさえできれば、よごすことに対する禁止はなくなってくると思うのです。

②創作遊具をつくる

私自身の創造活動をふりかえって思うことは、幼稚園には遊具が多すぎるということ。いや、もっと的確にいえば、既成のありふれた、手近な遊具が多すぎるということです。この状態では、子どもが遊具に規定され、遊具に使われています。平均台や、ボールや積木がなくては遊べないというのはおかしいことですし、あくまでそれはひとつのきっかけでしかなく、それから進んで、先生と子どもが自分たちに必要な遊具をつくっていくものです。ダンボールを使って、家や自動車をつくってみるのもその一つの例です。

大工部屋などがあって、自分でつくるということを知ると、子どもは夢中になってやります。こういう姿をみていると、子どもに必要なことは、既成のものではなく、自分でくふうできる素材だということになります。

③原始生活の体験

極端にいえば、私は子どもに、より原始的な生活をさせたいと思うのです。

夏には、はだし、はだか。それにははだしになってもけがをしないように環境を設定しておくこと。子どもは、もぐったり、はらばいになったり、のぼったりが大好きです。からだで覚えていくことの方が大切です。

ちょっとたいへんかも知れませんが、木の上での生活、あるいは、高いところに家をつくっておいて、ロープでのぼりおりすることができたらと思います。

④野外教育の必要性

本来なら、森や林や川があって、探険ができるくらいの広大な土地に幼稚園があって、子どもが好きなように生活できれば、それにこしたことはないでしょう。せまいコンクリートの庭、ブランコやスベリ台のあるのが幼稚園（子どもが成長する場）なのだ、と思いこむのは危険です。しかし、実際、都市化が激しい今日、教育的に利用される場が、比例して、狭くなりつつあることは、大いに憂慮しないではいられません。

せめて、都市においては週一回か、二回は、幼稚園をはなれて、自然にふれるチャンスをつくりたいものです。子どものエネルギーの開放を言葉通りしてやれる場があるとしたら、それは、人にぶつかる心配をもたずに、力いっぱいかけられる場所です。東京には、神宮内苑、ファミリィ・パーク、新宿御苑、代々木公園など他にもいくつかありますが、まだまだ少ない状態です。

幼稚園というのは、子どもに折紙や歌の技術を教えるところではないでしょう。人間形成の場であり、仲間づき合いや、先生との人間的ふれ合いの場です。そのふれ合いを躊躇させるのは先生のスカート姿です。女性本能がでてどうしてもおもいきり遊べないと思うのです。とにかく活動しやすい服装は先生から整えるべきでしょう。

子どもにとっての遊びは、おとなの労働と同じことです。我々が、たとえ経済的な余裕があるなしを別にして、仕事をしないでは生きていられないのと同じで、子どもは遊びなしではいられません。遊びには、身体づくりや、協調性を養うといった効用があるから、遊びが大切なのではなく、遊びそのものが大事な、かけがえのないものなのであって、結果的に、いくつかの効用があるといえます。本末を転倒しないで、遊びをみつめる必要があります。

幼稚園のカリキュラムを考えたとき、六領域からの発想で

は、どうしても形式的で、技術教育になる傾向があります。遊びによる教育は、あちこちで耳にしても、実質的には、かけ声だけの中味のないものになっています。もっと思いきった遊びの教育を考えると、どうしても、現場の問題にぶつかることになり、行政面での壁につきあたります。

◆自己を伝えていく先生

私どもは、東京近辺のいろいろな地域で、幼稚園や保育所、小学校の先生を対象に、ゲームの講習をひらいてきました。若い女の先生たちがほとんどですが、ファイトはあっても、身体の動きが伴わないという現象が見られます。三歳の子どもが押入れからとびおりるくらいです。幼児のエネルギーを受けとめる先生方の苦労は並たいていではないと思うものの、精神力、身体力ともに、もっと充実しなければならないでしょう。

ピアノが下手でもいいと思います。子どもには思いきって、自分をぶつけていく気力と自信をもった先生が必要なのです。それは、先生個人の問題もありますが、教員養成の問題、幼稚園のおかれている位置、サラリー、その他、山積みしているといってよいでしょう。

しかし、それらが解決されなければ一歩も進めないというのでは困るわけで、現在の苦難の状況から活路を見出していかなければならないわけです。

このことは、現在、遊びの研究、創作をつづけている私どもにとっても共通の問題です。一体、私たちは伝統をどのように受けとめ、その中の大切なものをどのように新しい世代に伝達していったらよいのか。もちろん、伝達だけではいけないわけで、私たちがそれに新しさを加味し、ときには全て創作していかなければならないでしょう。

私の考え方は、大まかになってしまうのですが、細かい技術のことより、それを支える根本的な問題、「人間教育」をどのように展開していくか、ということなのです。

それが理念だけでなく、現実化していくことに誰もが悩んでいることでしょうが……。

①先生が遊びをたくさん知ること

子どもと生活を共にすることが、先生にとって喜びとなって、初めて教育の可能性がでてくるといえます。喜びを感じられる状況がつくられなければなりませんが、もしそうでないなら、ひとつひとつつくっていかなければならないでしょう。伝統的な遊びを身につけ、身のまわりの素材をつかって、すぐに創作遊びができるようになると、先生自身の中に

喜びが湧いてきます。

創作ゲームというのは、何もめんどうなことではありません。私たちはよく、手近にあるほうきとか、新聞紙をもちよって、これでどういうゲームができるか、グループで考えることがあります。思いついたら、全員でやってみます。次に子どもの中にもちこみますと、子どもたちらしいくふうがでてきます。こうしてゲームをつくっていくと、まわりのすべてのものが、おもしろいゲームの素材であることがわかってきます。ゲームに対して関心がなかったはずの人までが、ひきこまれてきたりします。

教員養成のカリキュラムの中に、遊び、あるいはゲームの科目があるとはききません。これもたいへん残念なことです。今後、必須の科目としてほしいものの一つです。

伝統のないところに創造はないといわれるように、私たち若い世代は、創造することからきりはなされています。インスタントに、食物も娯楽も手にはいります。私たちが創造の喜びを知らないのに、それを伝えることはできません。そういう喜びを知ることがまず私たちに必要なことです。それは遊びやゲームに限らず、生活全般を含め、もちろん芸術教育の面でも大切なことです。

②子どものための図書館をつくる

子どもの生活には動と静があります。〝お話の時間〟が毎日あって、そのときには、ほのぼのとしたお話などをしてあげたいものです。〝龍の子太郎〟や〝エルマーもの〟など一カ月くらいかかって、毎日少しずつ読んでやったこともあります。そんな長い話、子どもにはわからない、という先入観を捨てて、やってみるとよいでしょう。たしかに理解の仕方は子どもによってもちがいますし、記憶しているのは、ほんの数場面かも知れません。

それは言葉では表現しえない感動というものが、お話の中にはありますから、あえてそれにこだわることはありません。

私は、幼稚園に一つずつ図書館を、といいたいのです。幼児が自由に見られるだけでなく、家にもって帰れるように、同じ種類の本を何冊かずつ置く必要がでてくるでしょう。

むりに絵本を読ませなくとも、先生がよい本をよんでやり、みせてやることで、十分影響力がでてきます。それがよい本の選択をしてやることにもなります。言葉で伝えなくとも、伝わっていくものがたくさんあるはずです。そういうものを大切にしていきたいものです。

③園児以外の子どもとのふれ合い

優れた先生を幼稚園ほど必要としている所はないのですが、それを育てるべき教育行政は、まことにさびしい限りです。待遇も改善されなければなりません。二〇歳前後の人に、人格教育をせよ、ということも当人にとっては厳しいことです。養成機関は、先生になる人に、自信と気力をもつような指導、幼児教育に喜びを感じるような指導ができるようにしたいものです。

先生になると、えてして子どもの世界だけに目がむいてしまって、視野がせまくなる傾向があります。大きくものをみる目がなくなると型やぶりの子どもを否定してしまいがちです。今はむしろ、型やぶりの子、いでよ！　という時ではないでしょうか。

そのためにも、近所の小学生などとふれ合うことは、大いに意義があります。とてもムリだと最初から否定してしまわないで、地域の子どもとのふれ合いが、その先生にとってどれだけプラスになるか考えてみてください。これは子どもが大きくなって、どうかわっていくか知るきっかけともなるでしょうし、自分の教育のあり方もそのことで、発展し、自信を得ていくでしょう。

以前は、地域には子どもの集団があって、そうした近隣の仲間どうしのつき合いによって、ずいぶんいろんなことを学んでいきました。今は、子どもが集団で遊んでいる姿など、めったにみられません。

受験勉強が、小学校の高学年の子どもを家にとじこめてしまいました。あるお母さんは、自分の子どもが外で遊んでいると、なんだか恥ずかしいといいます。むしろ遊んでいる子が不思議におもえる世の中です。

子どものエネルギーは、一体どこに閉じこめられるでしょう。子どもは、仕方なくテレビにかじりついているのです。子どもたちは、自分たちの場がどこにもないことに気づいているはずです。破壊にも、建設にも向かうエネルギーを、私たちは手をこまねいて見ているわけにはいかなくなってきています。

◆子どもの解放

教育というのは、幼稚園や学校だけで、できるものではありません。家庭もありますが、現在のように孤立した家族、それも兄弟の少ない家庭の中では自ら限界があります。一つには地域の集団が回復される必要があります。子ども会の中から、多くのジュニア・リーダーが育ってもらいたいものです。

私自身の経験からいっても、リーダーの養成は、小学生から始めなければ、たよりになるしっかりしたリーダーは育ちません。そして現在、私が直面している問題は、こうしたリーダーをどのように育てるかということと、育ったリーダーが、十分活動できる分野を開くことです。社会人になって、もう忙しくて何もできないのでは、宝のもちぐされです。自分の仕事をもちながら、そのエネルギーを次の世代の子どもたちのために使ってもらいたいと大いに期待します。そういうみでは、私たちは、現在、地域の子ども会、家庭文庫づくり、ハイキングや、キャンプなど、多方面にわたって活動をはじめております。また、昔からの遊びを現代に伝え、その上に、新しい遊びをつくっていかなければなりません。

◆遊びの回復

現在のように巨大化した組織の中で、私たちの力が微々たるものであることを、痛切に感じます。しかし、まず自分から一歩を始めよ、ということでしょう。

ともかくも、子どもたちに遊びを回復させることが、今日の幼児教育にとって、第一義的なものです。そのために、具体的に取り組む人が多数でてほしいものです。

遊びを大切にする教師と母親こそが求められているのです。

〝幼児を人として尊ぶ〟この根元に立ちかえって、子どもの願う〝遊びたい〟という欲求を満たしてやることが、我々おとなの役目となっています。

子どもの解放は、おとなの解放をなしつつということでしょうか。無限のエネルギーを私たちひとりひとりが受けとめるには、私たちの心が開かれ、目覚めなければと思います。

そうは簡単にいっても、それを実現していくには、私たち自身の厳しい努力がまずなければいけないわけです。

誌面の都合で、各項目について詳しく述べることはできませんでしたが、別の機会に、具体的に、方法、応用、発展等、書き述べたいと思っています。

（日本児童遊戯研究所）

変更のお知らせ

これまで毎年六月にお茶の水女子大学附属幼稚園で開いてきました「**幼児教育実際指導研究会**」は、当大学附属校園の話し合いの結果、当分休むことにしました。

従って秋には行なわないことになりました。

お茶の水女子大学附属幼稚園内　幼児教育研究会